不良娘がエッチな従順メイドに変わるまで

ご主人様のドロップ

夜士郎 【挿絵】はっとりまさき

立ち読み版

2DB
二次元ドリーム文庫

序　章　006
第一章　そして不良娘はメイドになる　010
第二章　ダメなメイドにはオシオキだ！　036
第三章　不良娘のはじめては　077
第四章　不良メイドのお風呂奉仕　121
第五章　脚とお尻のスペシャルタイム　157
第六章　そして二人は主従となる　199
最終章　247

登場人物紹介

Characters

間宮明日香（まみやあすか）

転校してきた不良娘。男にも負けない喧嘩の強さで『凶猫』と呼ばれている。真っ直ぐな性格だが単純でちょろい。意外に漫画好き。

宮藤一樹（みやふじかずき）

私立河桃学園三年生で生徒会長。品行方正で生真面目だが結構Ｓっ気がある。実はすごい屋敷に住んでいる。

「て、てめえのっ……童貞を、奪ってやるッ！」
なんて、彼女は――そんなことを言いだした。
「……いや、なにがどーして、そーなる」
「るせっ」
と、明日香は膝歩きで後方にへ、ズボンのチャックを下ろしにかかる。
「お、おい、明日香。あんまり考えなしに行動するのは……」
「黙れっつの。てめえに、舐められたままで終われるかっ」
彼女は頑として聞く様子がない。
要するに、意地なのだろう――得意分野である喧嘩で思い知らせることができると思ったのに、ファーストキスを奪われて、散々やりこめられての負け戦。
だったらどうするか？　キスよりもっと凄いモノ――童貞を奪ってやると。
負けず嫌いの彼女はそんなことを思いついてしまったのだろう。
「へ、へへ……覚悟しやがれ」
指抜きグローブに包まれた彼女の手がチャックを下ろし、パンツをずらす。とたん、びいんっ！　と跳ね出る肉の柱を目にして、「ふひゃっ」と明日香は悲鳴を漏らした。
「あ、あああ、あいかわらず……凶悪なカタチをしやがって」
それは少女の秘所より得た性エネルギーによって雄々しく屹立している。

彼女はその肉槍の上に股間を移動させる。
スカートの裾をウエストに挟み込んで、はしたなく濡れた肉孔を露出させた。
（うわ……）
男性器の、ほんの頭上に――ヌレヌレの、女性器が滞空している。
それはなんて、いやらしい光景だろう。
「へ、へへっ……。どうよ？　オレのレイプで、童貞じゃなくなっちまうぜぇ？」
……それはむしろご褒美に近いのだが、彼女の感覚においては屈辱的な事柄なのか。
「いや、そもそも――僕が童貞だって、いつ、言った？」
ぴたりと。明日香の動きが止まった。
「……え？　ち、……違う、のか？　わたしが初めてじゃ……ないの？」
ひどく――泣きそうな顔であった。
「いやごめん童貞ですハイ」
罪悪感をサクサク刺されまくって、すぐに謝り白状する。
「っ、て、てめっ！　この、くそっ……！」
とたん彼女は顔面を、羞恥と怒りとに染め上げて、男根に手を伸ばすと――。
「いでででででででで！」ぎゅう、と握りしめてきた。
「な、なんてことを……」痛みに喚く一樹を見下し「フン」と明日香は鼻を鳴らす。驚か

せやがってと、小さく呟いて――握ったペニスを、己の秘所へとあてがった。
じゅくりと、花唇を亀頭が割る。ねろぉと、愛液が肉鞘を伝う。
「あ、明日香っ……」
するのか、本当に。
間宮明日香とセックスを。
こんな――いつも業務に使う、いつ誰が来るかもわからない生徒会室で？
「いや、待て。こういうのは、もうちょっとこう、ムードというか……」
「うるせえ、乙女か。大人しく、犯されてやがれっ……」
そうして不良娘は腰を落としていく。
めりぃと、そんな軋みが肉棒に伝わってきて。
「ッ、ひっ⁉　っ、〜〜〜〜づ、ぅっ……⁉」
少女の総身がびくびくと震え上がった。よほどの痛みが襲っているのか、顔がぎゅう、としかめられて、それでも止めることなく彼女は腰を下げていく。肉の唇が左右にハの字を描いて、亀頭がその内部へずぶ、ずぶと潜り込んでいく。
「は、ああ……か、ずき……」
乳房を震わせ、熱い吐息を漏らしながら。
「一樹、一樹のがっ……はいる、入って、くるっ……！　かずきっ……！」

明日香は、彼の名を呼んだ。
「……明日香」
——初めて、だった。初めて、明日香に名前を呼ばれた。
「く、ぐぅっ……な、んだよっ……」
「いや——その。無理をするなよ」
「へっ、この、くらいっ……なんてこたぁ、ねえよっ」
額にはぶつぶつと玉の汗が浮かんで、笑みを形作る口の端はヒクついている。明らかな作り笑顔、男には想像もできない苦痛が、彼女を苛んでいるのは明白であった。
「んっ、ふぅう……は、う……」
真っ赤に染まった太股をよじり、尻肉を震わせながら、けれど不良娘の肉唇は意地をもって生徒会長の童貞ペニスを噛み締め呑み込んでいく。
——ぶつりっ、と、何かが裂ける。「ひぁっ」と明日香は顔を仰け反らせて、同時に、接合部からたらりと赤いモノが流れる。
それは破瓜の証だ。
「へ、へへっ……破れ、たぜ……」
少女は、嬉しげであった。自分の処女を貰いたのが、少年でよかったというように。
ずぶ……ずぶ……と肉鞘が膣壁へ包まれていって、明日香の尻が少年の腰に密着する。

「はぁっ……」熱い吐息が、不良女子校生の唇から漏れた。
ペニスの全てが――ヴァギアの内部へ埋没していた。
まず感じたのは、温度。そして、全方位から押し寄せる、ペニスへの強烈な圧搾だ。
（く、あ……き、きっつぅ……！）
先ほど、手で握られたときよりもなおきついかもしれない、括約筋の収縮である。
「あ、は……。一樹の……私の中で、ドクドクいってるぞ……」
これだけみっちりと抱きつかれていれば血管の脈動も伝わるだろう。それほどに狭隘な肉の孔だ。鈴口から根本まで固く絞られて、潰れてしまいそうなほど。
「く、ああっ……明日香っ……！」
たまらずに、呻く。
熱せられたゴム塊にチンポを突っ込んだような感覚だ。瑞々しい女子学生の新鮮マ〇コは力が有り余っている様子で、強烈に、ぎゅむぅ、ぎゅむうと搾りあげられて。
「うう、ぐうっ！」漏れ出す快感の喘ぎを、一樹は抑えられない。
（きっ……気持ちいいっ！　女の子のあな、こんなにッ……！）
脳の沸きたつような快美が、下腹からこんこんと湧き上がるのだ。
「へ、へへ……だらしない顔しやがって。そんなに、オレのあながいい、のか……？」
両脚をカクカクと、余裕なく震わせながら――不良娘は偉ぶって、笑う。

「あ、ああっ……！　くうう、きもち、よすぎっ……！」
頭の中は真っ白で、ただ頷くしかない――童貞喪失の初セックスは、それほどに甘美。
「へへっッ……せ、せいとかいちょうが、なさけない、ぜっ……！」
必死に尊大さを繕おうとする女学生の細首に汗が流れ、胸の谷間へ落ちていく。
しばし二人、動かない。動けない。はあ、はあと――上空より降り注ぐ彼女の吐息は、真夏の空気のように湿り気を帯びて、熱い。
「ん……ふ、あ……。かずきので、なか、ジンジンするっ……」
小さく腰をよじらせる明日香の声から、わずかに、痛苦の影が薄れていた。
汗の滲む制服がしっとりと少女の肢体に張り付いて、そのしなやかな女形を描きだす。
「ああ、ン……！　な、なんか……だんだん……」
少女が甘い吐息を漏らして、熱せられたゴム塊が解れていくように、ペニスを包むその肉壁が小さな蠢動を開始した。
（う、わっ……オマ〇コが、チンコ……、握ってるっ……⁉）
拡張された処女膣が少しは馴染んできたのだろうか。まるで、別の生き物がそこにいるかのように――彼女の腰と別個に動く膣肉がペニスを刺激してくれる。
「くっ……ううっ！」
たまらずに、一樹の腰が動き始める。もっと気持ちよくなりたいと、ぐっ、ぐっと力を

籠めて、破瓜を迎えたばかりの肉孔を擦りあげていく。
「んんっ、ふぁあ⁉　こ、こら、かってにうごくっ……んふぁっ」
明日香の声音に嬌声が混じる。
ぬらついて、真っ赤に染まったとば口が、ぶちゅ、ぶちゅと粘液を吐きこぼしていく。
「いや、あすかの、腰も……動いている、よ」
一樹の指摘する通り。男の胸板に手を置いて揺らす少女の腰つきは無意識なのか。黒髪が揺れ、尻が揺れて、腰が揺れている。にちゅぐ、にちゅぐと結合部から粘ついた水音が響いて、そのたびに明日香の唇から甘い吐息が吐き出される。
「んっ、く、んっ……な、なんだ、これッ……、や、やばっ……ひぃんっ……」
戸惑うような明日香の声は妙に艶めかしい。桃色に染まる若鹿の美脚がその付け根から伝播する快感によって、恥ずかしそうに悶えさせられている。
その、両太股を掴んで――腰を思い切り突き上げた。
ズン！
「あひゅ⁉」と、明日香の瞳が上向きに跳ね上がる。腰骨がビクンと震えた。
「て、てめっ……急に、なにをっ……」
と、明日香は一樹の手を外そうと腕を伸ばす。その前に、もう一つ、突き上げる。
ぐじゅぶっ！

「んひいんっ！」今度の声には男の股間を疼かせるような悦が籠もっていた。
「て、てめぇ！　調子にのんじゃ、ひ、あぁあああ⁉」
少女の不平を無視して。腰を上下に動かした。
ぐっじゅ、じゅぶっ！　ぐ、ぐじゅぶっ！
「ふぁあ、ああっ⁉　や、やめろ、やめろぉっ！　んくひぃい、ふぁあんっ！」
不良娘の腰がよじれて、その内部で熱く灼けた肉壺がギュムギュムと肉根を搾ってくる。
情熱的に、ペニスを抱きしめているかのよう。
「くうあっ……！　明日香のアソコ、僕のチンコが、凄い、好きだって、さ……」
「ばかっ……！　は、恥ずかしいこと言ってんじゃ、ねっ……！　んくふぅうっ！」
淫らな音を立てる結合部。そこを中心にして艶めかしく捩れる少女の肢体。男を興奮させる悦息を漏らしながら睨みつけるその瞳も、また一つ肉孔を穿たれて蕩け落ちる。
「ひっ、ひぃんっ！　もう、止めっ……！　んひぃっ、アソコ、焼けるうぅっ……！」
同級の女子校生は、破瓜セックスの快感に溺れようとしていた。
生徒会室などという日常の場所で――よがっていた。
（こんな……いやらしいのか。明日香が感じている姿って……）
凶暴な不良娘。そんな明日香の可愛くてエッチな姿。
それを見ることができるのは、僕だけの特権だ。

ずっぶ！　ずっぶ！　ぶちゅる！　にゅぶちゅ、ぐちゅんっ！
「くひぃいっ！　やめ、やへろぉっ……！　んひぃ、んふうぁあ〜〜〜〜ッ！」
肉槍が幾度も、肉壺を突き上げる。ずぶぶっ！　と根本まで、膣孔と比すれば太すぎる肉凶器が埋まりきり、そうしてぐちゅると淫液をしぶかせて抜き出される。
「か、かずきのがっ……にゃ、にゃかぁあ、ずりずり、擦ってるっ……！」
多少馴染んだとはいえ、破瓜膣の強烈な締め付けはいまだ健在である。
それはつまり、彼女が感じるペニスの拡張感も相当だということだ。
「ふと、いいっ……！　あつい、んぁあっ、んひぃあっ！」
女子校生が苦しげに腰を震わせるたびに赤いタイが跳ねて、ゆさっ、ゆさっと乳房が揺れる。それに誘われるように、制服を捲り上げ、ブラジャーのホックを外した。
ぷるん、ぷるんっ！　と跳ねて飛び出る乳肉を、両手で掴む。そうして、「んふぁぅ⁉」と顎を上げる明日香に構わず、温水を詰め込んだその乳風船を揉み上げた。
「あ、んふぅっ⁉　い、いまむね、むねはだめだぁっ……！」
どれほどの乳悦に襲われたのか、明日香の背骨が激しくくねりあがる。
むにゅりっ、むにゅ！　むにゅむにゅぅ！
「て、めっ、だからだめだってっ、いって、んくひっ、んっくふぅ……」
乳悦に頬を染め、かぶりを振る。乳房も感度を増しているのか。

プリンのように柔らかくそれでいて張りたっぷりの肉風船、その先端に色づく桃突起はビンビンに尖りきっていた。それを、両手の親指と人差し指で摘み、つねってみれば。
「んひぃいいいい！」涙を溢して首を振り、少女は懊悩するのである。
「やめっ……わたひのむねで、あそぶなっ……あああぁン！」
腰の抽送も止めはしない。ずぶ、ずぶと肉棒を出し入れするたびに、何度も擦られて赤みを増した女子校生ヴァギナが開いて窄まってを繰り返す。
「ああ、くしょぉっ……！　おかひっ……おかひくなるぅっ、わたひぃいいっ……！」
爽やかであった夏服は淫猥な汗にまみれ女体に張り付き、艶めく黒髪はその輝きを増して悦の深さを物語るように激しく揺れる。蹴りを繰り出す生美脚は乳房を揉むたびに震え上がり、丸見えのおへそが吐息の荒さにひゅくひゅくと、膨張と収縮とを繰り返す。
「へんに、なっひゃぅううっ……！」
「どうして？　僕の……なにのせいで？」
「こ、これだよぉっ……かずきのぉ、ちんぽ、だよぉっ……！」
純情不良娘はわずかにためらい、しかし呂律の回らぬ舌肉にて男性器の俗称を言葉にした。その理性は一樹のチンポに小突き回され溶かされつつあるようだ。
「ひくひょっ、ひくひょうっ……わたひが、犯しゅはずだったのにぃっ、んああ！」
悔しそうに——喜悦を唄う。

「有名な、不良もっ……くっ。ご主人様のチンポには、勝てないのかなっ」
ずぶちゅ！　ぐっちゅぶ！　ずぶちゅぶ、ぐちゅ！
「あううンッ！　や、ら……まけたく、なひっ……！　わた、ひがっ……この、まっどきゃっとしゃまがぁっ……！　かずきのちんぽなんかにぃ！　うううン！　あーっ」
涙を流し、首をぶんぶん振り立てて――けれど彼女の秘所はだらだらと、涎を垂らして締め付ける。腰をよじってチンポを捻り、さらなる快感を与えてくれる。
いつも、自分が執務を行う生徒会室で、不良娘に痴態を晒させている。
わたし、わたしとよがらせて。
それを思うだけで――下腹に、快悦のマグマが溜まっていく。
たわわな乳果実を揉み上げながら、腰をぐいぐい押しつける。不良娘は「あううん」「んくぅ」と艶めかしい悦声を、桃色の喉元を晒して垂れ流す。
「っ、くひぃっ……！　またぁっ……いっひゃうぅ、いかされひゃうぅうっ」
それは嫌だと嘆きながら、けれど快楽を貪る少女の淫猥な腰つきは止まらない。
よじれるヒップ。ぬちゅぬちゅと泣く破瓜マ〇コ。両脚が、ひくひくっと痙攣する。
「イカせるよ、明日香っ……ご主人様のチンポで、イカせてあげるっ……！」
ずぼずぼずぼっ！　ぐっちゅ、ぐじゅ！　ぐじゅぼ！
処女を失ったばかりの少女を相手に、呵責のないストロークを叩き込む。喧嘩には慣れ

「ったく、なんでこんな……広いんだよ暗いんだよこの屋敷はっ……！」
――実際のところ、ホラーは苦手だった。
恐怖映画など冗談ではない、ＴＶで心霊特集があれば即座にチャンネルを変えるほどだ。
闇に沈んだ奥深い廊下や階段の陰に、何かが潜んでいる気がしてくる。
月光に浮かぶ、人物画。その目がこちらを見ている気がする。
天井になにやら恐ろしげなモノが張り付いている気がしてしまう。
恐怖心が、嫌な想像を膨らませていく。
それに比例するように、尿意もまた高まっていくのだ。
「う、やっ、べ……漏れちまいそう」
一度トイレに行って戻る、なんて嫌だ。もうこんな所、歩きたくない。
さっさと終わらせたいから、スカートをひるがえし早足で廊下を進んでいく。
もう少しだ。あの廊下を曲がればもう終わり。
胸中に満ちていく不安や怯えが、希望へと塗り替えられていく。
けれど得てしてそういうときにこそ――死神は笑うものだ。
ぽん、と。肩に何かが触れた。人の手のような、感触。
「……」懐中電灯で、背後を照らす。
――そこには下から光を浴びて浮き上がる、人の生首があった。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」
　ぺたん、とその場に座り込む。
「お、おい⁉　明日香⁉」
　生首が声を出す――いや、違う。一樹である。心配そうな顔をして、一樹がそこに立っていた。着用しているパジャマは暗色で、ゆえに顔が浮かび上がって見えたのだ。
「だ、大丈夫か、明日香？」
　その声に、安心してしまって――。
「……だ、だめ。あ、ふぁああだめぇえええぇえええええ」
　下腹が、緩んだ。股間に熱いものが溢れ出す。
「――へ？　あ……」
　床に転がる懐中電灯は奇しくも明日香の両脚を照らし出していた。ゆえに一樹にも見えてしまう、彼女の脚の狭間から、絨毯へと広がっていく濡れ染みを。
　漏らした。漏らしてしまった。
「ち、……ちくしょう、ちくしょう、びっくりさせんなよぉっ……馬鹿ぁ」
　一樹の目の前で――お漏らしをしてしまった。
　凄まじい羞恥に襲われて、肩が震える。なにもかもをぶち壊したくなる。
「い、いや、その……ごめん。不用意だった」

「ごめんひゃねえよぉ……。ばかばかばかっ、ばかぁっ！」
メイド服もオシッコでびちょびちょだ。これでは洗濯の担当に、お漏らしを知られてしまうではないか。そうしていずれはメイドの全員にも知れ渡るのだ。
間宮明日香はお漏らしメイドだ――と。
「し、死ぬ！　死んでやるぅうう！」
「待て待て窓から飛び降りようとするな！　ここ四階だ、洒落にならんっ！」
窓枠に手をかけたところで後ろから羽交い締めにされる。
「どうどう……落ち着け、落ち着けい」
「うるせえやいっ、馬鹿ぁ。ふえええん……」
ぺたんとその場に座り込んで――べそをかいてしまった。

正座である。
制服に着替えた明日香の目前で、まるで武士のような、見事なまでの正座である。
彼女は目の前で椅子に座っていて、むう、とほっぺたを膨らませていた。
従業員用のロッカールームで彼女はとりあえず制服へと着替えた。
夜着などの着替えは、あてがわれた部屋にある。他の従業員と同室のため、お漏らしをしたままの恰好では戻れなかったのだ。

オシッコで濡れたメイド服はとりあえずゴミ袋に包んである。
とりあえず今は――彼女に許しを請うことだ。
「……んで？　私を驚かせて、楽しかったか？」
「い、いや、そんなつもりはなかったんだが……ごめん」
彼女に夜間見回りの業務が伝えられた現場に、一樹は偶然居合わせていた。
その際、夜の屋敷というものに怯えていた感じの明日香が心配で様子を見に来たのだが。
――肩を叩いたくらいで漏らすほどに驚かれるとは、さすがに想像できなかった。
軽率であったことに違いはなく、だから言い訳の余地なく頭を下げるしかない。
と。明日香の、右の生足が伸びてきて。
その靴裏がぐっ、と頭の上に置かれた。というか踏まれた。
「ふん……まったく。ご主人様だからって、何をしてもいいわけじゃねえぞ？」
メイド服を脱ぎ捨てて、さらに怒りに燃えている今の彼女はメイドではなく『凶猫』間宮明日香であった。不良娘の領分を取り戻した明日香の、すらっと伸びたしなやかな美脚が、ぐいぐいと頭を踏みつけてくる。
「うりうり、このこの、ちったあ反省しろっ」
嗜虐心たっぷりの笑みを浮かべて、明日香。
ヒラヒラとミニスカートが揺れて、太股の付け根ほどまで捲り上がっていく。

その、奥で。見えてはイケナイ肌色とか、うっすらな毛とかが、見えた。
「……明日香。アソコ、見えてる」
「ふえっ⁉」慌ててスカートを押さえつけ脚を閉じる、彼女の顔に朱が昇っていく。
オシッコまみれのショーツもまたゴミ袋の中で、今の彼女はノーパンであった。
「て、てめっ、私が怒ってるのにっ……しかもッ！」
と、明日香がこちらの股間を指差し叫ぶ。
「ふ、膨らんでるじゃないかっ！　わ、わきまえろよ反省してんのかっ⁉」
柳眉を逆立てる明日香の仰る通り。というか、目線にチラチラと、見えそうで見えるノーパンスカートの中身を置いてムスコが反応しないわけがない。
「まったく、もう……もっとこう、ジョーキョーを考えやがれよ、コレっ」
と。ぐにぃっと――明日香の靴先が、股間を圧迫した。
「ちょ、あす、そんなトコロ、踏むなっ……」
「うるせ。だったらちっちゃくしやがれ、ほぉれほれ」
ぐいぐい、ぐいぐいと、固い爪先がズボン越しに男根を踏みにじる。
「う、うう、うくぐっ」と呻く一樹の股間部で――なおさらに膨らむ哀れなムスコ。
「おいおい……。なんで踏まれて、大きくなるんだよ、それ」
「だ、だって、明日香が刺激するからっ……！」

言い訳をしようとする一樹の目前で。
明日香が口の端を愉しそうに、ニィイ、と吊り上げた。
嫌な予感が、背筋を撫で上げる。
「まったく……そんな恥知らずなモンにゃ、ヤキを入れてやんなきゃなんねなぁっ」
と、彼女が靴を脱ぎはじめ、さらには靴下まで脱いでいく。なにを、と声をかける一樹の眼前に、学園と屋敷で一日動きづめだった美少女の素足が突き出された。
「ヤキ入れんだよヤキ。ま、そんなキタナイもん、手で触るのは勘弁だからよ」
だからこれでヤキを入れてやる——と。
明日香は脚の指先を、まるで別の生き物のように、ワキワキと蠢かせたのだ。
「ちょ、おい、明日香……」
止めようと、立ち上がろうとして——頭を踏み押さえられる。
「何だよ？　私にあんな恥をかかせといて、文句あんのかテメェ？」
「うぐ」そう言われては、動きようもない。
「いいから、動くんじゃねえぞ、生徒会長さまよぉ……」
瑞々しく、艶すら帯びた少女の美脚が股間に伸びて、その指先がベルトを掴み解いていく。なんとも小器用にズボンのチャックを摘んで降ろして、パンツまで降ろす。
肉棒は引きずり出されるに及ばすハロー！　と頭を突き出した。

「へへ。もうこんなに調子に乗ってやがる。こりゃ、ヤキの入れがいがあるぜぇ」
頬を赤らめ嗤う明日香の表情こそ調子に乗ってきている感じだ。
そうして彼女は椅子に座ったまま、一樹の性器を。
たん、と蹴りあげた。
「うぐぉっ⁉」
下腹に響く鈍い痛みに呻きながら――一樹は、掲げられた制服女子の、右美脚の付け根をチラ見してしまう。まあ、男の本能である。
ズン！　と左の踵でペニスを強く踏みつけられた。
「あひんっ」
「まだ反省してねえな？　まったく、もう……んなにココが見たいのか？」
などと言いながら、スカートをほんのり持ち上げる。どうしても目線はそこへ引きつけられて――彼女は即座にスカート下ろすと左足をぐいぐいと押しつけてきた。
「く、ううっ」興奮になお膨らもうとした男根が押し潰され、倍加した鈍痛が内臓を襲う。
「へへっ、だぁめ。見せてやんねっ」彼女はぺろっ、と舌を突き出して。
さらに踵を右に左に、ぐりぐりとこじってきた。
「うぐっ、ううっ、ぐぅっ……！」
苦悶に身を捩る一樹へ注がれる彼女の視線が、イケナイ方面へと昂ってゆく。

「こんなもんでっ……さんざん私を、弄びやがってッ」
引き締まった太股の裏まで見せつけるように、美脚をひねり回す。ペニスが折れそうなくらいによじれて――疼きにも似た何かが、下腹に膨れあがっていく。
女の子に――性器を踏まれている。その背徳が、ぞわりと背筋を撫で上げた。
「おいおい……まーだ、大きくなるのかよっ……」
呆れ気味の明日香の脚下で、ムクムクと成長していくマイ息子(サン)。
「まったくもう」と、素足となった右の脚までがペニスへと伸びてきた。
両脚をはしたないガニ股に開いて、つるりとした足裏をぺたりと性器に張り付ける。
足裏のサンドイッチだ。
「小さくしやがれ、オラオラっ」
そうして左右の足裏でズリズリと勃起ペニスを擦り始めたのだ。
「うぁっ、くぁあ!? うぁう、ううっ！」
まるで背骨そのものをしごかれているみたいな感触に、一樹の腰が跳ね上がる。
グロテスクな性器をさすりしごく可憐な少女の足裏。潤滑液すらないその足コキによる擦過は、敏感な海綿体にとって強烈に過ぎる刺激であった。
「びくびくびくびく、震えてるぞっ。どうだ、苦しいかっ」
呻く一樹を前にして、愉しげな明日香の額に汗が浮いている。

ひらひらと、羽のように左右に開き舞う二本の生足も汗ばんで、艶を増している。
「く、う、うあぅ……く、くるしい、というかっ……！」
どちらかと言えば――気持ちいい。頭の中にドロドロと、快感の毒が流れ込む。
「おおぅっ、ベタベタのが出てきたぁっ……」
陰嚢より滲む男の愛液が絞り出されて、花のような少女の足先を穢していく。
「おいおい……脚で苛められて涎垂らしてんじゃねえぞっ」
足指に透明汁を絡ませて抗議する不良娘の声色はどこか嬉しげであった。
穢れた足の親指と人差し指とがクワガタのようにわきっと開く。そのあぎとへ、チンポを挟み込むとと――ずりっずりっと上下にしごき始める。
「う、うくっ……ふぅおっ」
ぬらついた我慢汁が潤滑液となって、生指は滑らかに男根を撫でていく。ばたつくような両脚の動きは、手に比べればさすがにぎこちない。斜めに逸れたり左右に折れたり、また力加減も大雑把で、けれどそれがまた、予期せぬ快感を生み出すのだ。
「おらっ」と、ときどき踵が金玉を蹴り込む。脳天まで駆け抜ける鈍痛じみた快感に、「んぐぅっ！」と悲鳴をあげる一樹の腰が震え上がった。
「へへっ……いい恰好だなぁ、生徒会長さまよぉっ」
正座したままの生徒会長がチンポを苛められてよがっている。

「すげえ、可愛い……可愛すぎる……ヤバイ、ヤバイヤバイぱないぱないヤパイ」
「ご主人様、感染ってるにゃん……」
と、まんざらでもないのだろう、明日香はネコミミを目立つように揺らしてくれる。
そんな明日香の目の前で。一樹は鞄からまた一つ、とある用具を取り出す。
それは尻尾であった。明るい茶色の、三十センチほどの尻尾だ。内部には針金が仕込まれていて、Ｊの字で固定されている。その尻尾の、末端――尻尾そのものの終端の逆側は。
「……おいゴラ、クソご主人」
ピンク色の円球が連なる棒状のもので形成されていた。
「やっぱり、ネコミミメイドには尻尾もいるよね」
「いるよね、じゃねえっ！　そ、そんなもん、どこにどうやって着ける気だよぅっ！」
そのカタチを見てそれがどういうモノか、どう装着するモノかは察しがつくのだろう。
「んん～？　何を想像しているのかな？　エッチなメイドだなぁ」
ニンマリと一樹は笑う。我ながら、人の悪い笑みを浮かべている自覚はある。
「あうあう」と、不良メイドは恥ずかしそうに口ごもる。
「そんなエッチなメイドさん。ご主人様の命令だ。スカートを捲って貰いましょうか」
「……ああもう、クソ！　この、エロご主人ッ！」
恥ずかしそうにフイと顔を背けて。けれどメイドは従順に、スカートを捲り上げていく。

美脚を艶で包み込んだ黒ストッキングが、下から上まで露わとなって。
本日の彼女の脚には、ガーターベルトは装着されていなかった。ストッキングの上端はゴム帯で、それが太股にきゅっと食い込んでいる。
そうして肌色を晒す領域のさらに上方は。
水色と白とが横線を描く、木綿地の、どこか野暮ったい下着に包まれていたのだ。
「――これは」
これは……縞ぱん、と呼ばれるモノではなかろうか？
「メ、メイドには……こ、こういうのが、似合うんだろう？」
顔は横のまま、目線だけをこちらへ向けて恥ずかしそうに、明日香。
そういえば、以前にそんなことを言ったこともある気がする。だが、それを覚えていて、さらには喜んでくれるだろうと、趣味ではない下着を穿いてきてくれたのか。
「ど、どう……だにゃん、ご主人様？」
「――感激だ」
なによりも、ご主人様のために穿いてきてくれたというその行為こそが嬉しかった。
「というかそれ、僕とのエッチを期待してたってことでやっぱエロいね、君」
「なッ！」
「そんなエロエロなメイドにこの尻尾は相応しい。ということで後ろを向いて」

「なにがということなのか、わからねえ……」
呻きながら――彼女はスカートを捲ったまま、やはり従順に背を向けた。
机に手をつかせ、尻を掲げさせる。張りに満ちた縞ぱんヒップが、一樹の目の前にさらけだされた。その尻を、撫でる。「ひゃうっ」と彼女が腰を跳ね上げる。
尻肉の半ばが見えるまで――縞ぱんを下ろした。下着のラインと尻谷が、三角形を描き出して、その狭間に覗く皺の孔はひくひくと震えていた。
「相変わらず、いやらしいおしりの穴だな」
「そんなとこにいやらしさを感じる方がどうにかしているにゃん……」
凄まじい羞恥に明日香が身を捩れば尻の孔も照れたように蠢く。尻尾の挿入部をべろりと舐めて唾液を付着させ、その淫猥な排泄孔にあてがう。
するとどうだろう、不良メイドの括約筋が、自ずからクポァ、と口を開いたのだ。
ペニスに小突かれまくったその刺激を身体が覚えているのだろう。
「はは。明日香の肛門、早く入れて欲しいってさ」
「な、ななな、何を馬鹿なことをっ……！　んひっ！」
反論しようとした不良メイドのアスホールへ、尻尾球を押し込んでいく。
ずぶ「あくひっ」ずぶ「んふぅ……」ずぷんっ「くはっ」ずぬぷ「おふぅっ」
一つ棒球が挿入されるたびに括約筋がうにっと拡がって、少女は甘い吐息を漏らす。一

樹の肉棒に解された皺の孔は、桃色を濃くして美味しそうに球形を呑み込んでいくのだ。
そうしてその全てが、少女の尻に埋没した。
「んあ、ふぁあ、おしりのおくまで……ながいの、はいってるぅっ……！」
ネコミミ少女は尻尾をひくひくさせてよがっていた。
挿入部の長さはおおよそ二十センチはあったろうか。直腸の奥まで届いているだろう。
「はあっ……はぁっ。また、こんな……おしりになんてっ……」
Ｊの字を描く尻尾は、背中の方へ吊り上がっている。だから気持ち悪そうにお尻を捩ればそれに合わせて、まるでメトロノームのように遠心力たっぷりに揺れるのだ。
「んっ、ひぃっ！　なか、こしゅれてるぅっ……！」
直腸内部を擦られて、切なそうに明日香が呻く。
「ほら、それじゃあ明日香？　接客の練習だ」
一樹の指示に、「うう」と明日香が居住まいを正す。
アヌスに異物を挿入したままの状態で、行動せねばならないのだ。
「ご主人様……ほんっとうに、変態だにゃん……」
恥ずかしさともどかしさと呆れの入り混じる複雑な表情で明日香が呻いた。
一樹が席に着く。学習机を二つ突き合わせてクロスを掛けただけのテーブルだ。
「い……いらっしゃい、ませ……。注文は、なんだ……にゃん」

接客メイドの頬は赤く、うなじは汗ばんで、瞳は仄かに潤んでいる。肛門からの刺激に反応しようとする身体を、どうにか制御しながら――彼女が訊いてくる。
「んんと。オススメは、なに？」
「お、オススメ？　えと、んと……パ、パウンドケーキ、だったか？」
「ちゃんと勧めなきゃ。笑顔で笑顔で」
「お、お……う。オススメは……パウンドケーキ、だにゃん」
「んじゃそれと、あとコーヒーを」
「かしこまりました……にゃん」取って付けたような猫語で、明日香が踵を返す。振り返った反動で尻尾が動いて「んひっ」と小さく肩が跳ねた。
（ふむ。メイド服を着たまま……ぱんつが見えてるのって、なかなか趣があるな）
尻尾の谷部分に布地が乗っかっているから、縞ぱんは隠しきれていないのだ。
彼女が歩くたびに尻尾が揺れて、腰がひくつき縞ぱんがよじれる。「んっ、んっ」と、メイド少女は悩ましく尻をくねらせながら、モデルのように歩いていく。
歩くほどに排泄道が抉られているのだと、想像するだけで情欲が掻きたてられた。
教室の端、パーテーションに区切られた即席の厨房へ一旦身を隠してまた出てくる。白手袋に包んだ両手に、トレイを持っている。もちろんその上には何も乗っていない。
「お……お待たせしました……にゃ」

と、そのトレイを机の上へ置こうとした彼女の尻尾を。くい、と引いてみた。
「んひぃいいっ!?」とたん、ビクン！　と縞ぱんヒップを跳ね上げたメイドの手からトレイがこぼれて、それは一度一樹の脚に当たり、床へと落下してしまう。
「て、てて、テメ、なにしやがんだッ」真っ赤な顔で噛みついてくる。
「ほら、明日香。今ので机の上とか床とかにコーヒーが溢れちゃった。拭かなきゃね」
「誰のせいだ誰のっ……！　まったくもう」
ぷりぷりと頬を膨らませて、明日香は手に布巾を持つ態でテーブルの上を拭いていく。
「ああ、ここにも溢れちゃったんだ、拭いてくれる？」
そんなメイドさんへ身体を開いて。股間部を指差してみた。
「なっ……！　てめ、んなッ……！」
「こういう不慮の事態も想定しないと。ほらほら、口調にも気をつける」
「くぅううっ……！　わ、わかった……にゃん」
悔しそうな上目遣いで、ネコミミメイドが膝をつく。そして白手袋で股ぐらを拭く——真似をする。「もっと、ちゃんと」と一樹に言われ。
「くっ……！」と悔しそうに見上げながら、その手を股間に押し当て、撫で拭いた。
「う、な、なかでどんどん大きくなってやがる……」
さするごとにムクムクと、膨らみを増す一樹の股間部である。

「その膨らんでるヤツも、汚れて怒ってるみたい。拭いてくれるかな」
「……そう来ると思ったにゃん」
呆れたように、白手袋がズボンの前を開く。下着からペニスを引きずり出す。
むわっ……と。一日経て、それなりに汚れた肉棒が、メイドの前で屹立した。
「まったく、しょうがないご主人様だにゃあ。き、綺麗に……してやるにゃ」
滑らかなシルクの手袋を男根へ添えて。優しげに撫でていく。肌触りのよすぎる手袋が敏感な肉棒をさするたび、脳の中にとろんとした快悦が広がっていく。
「ん……お、おう。ふう……本当に、力加減がうまくなったよね、明日香」
「もう、これのカタチ、私の手が覚えちまったよ」
ナデナデナデナデ、可憐な手を包む絹袋がグロテスクな肉棒を撫でる。気持ちよさそうに男根が震えて、その先っぽでじんわりと先走りが水玉を膨らませていく。
「ちゅう」と。そうして欲しいと言わずとも、彼女はそれに唇を寄せて吸い取った。
「せっかく綺麗にしてるのに……汚すんじゃねえにゃ」
と、舌先で亀頭を撫でる。一晩寝て、さらに日中汗をかいたり幾度も尿を放出した排泄器である。一日の汚れがこびりついているはずなのに、不良メイドは躊躇もなく、猫が毛繕いをしているみたいにぺろりペロリと舐めていく。
「きちゃない……チンポ。キレイにしてやるにゃ……、レロ……んちゅ、ネロレロ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!